



**Data**

監督・編集：スティーヴン・オカザキ  
原案：松田美智子「サムライ評伝三船敏郎」（文藝春秋刊）  
脚本：スティーヴン・オカザキ／スチュアート・ガルブレイズ4世  
ナレーター：AKIRA  
出演：三船史郎／香川京子／司葉子／黒澤久雄／スティーブ・ン・スピルバーグ 等

■■■ショートコメント■■■

◆「日本映画史上最高の俳優は誰か。これは意見が分かれるところですが、私にとっての最高のヒーローは三船敏郎意外には考えられません。スクリーンに映し出されたミフネは、いつも格好良く、誰も予測ができぬ、唯一無二の存在でした。」これが本作を監督したスティーヴン・オカザキの意見だが、私もそれに同感。

私は『七人の侍』（54年）、『用心棒』（61年）をリアルタイムでは観ていないが、『隠し砦の三悪人』（58年）は、子供心に小学生時代に観た記憶がある。また、『赤ひげ』（65年）は、大学時代にほぼリアルタイムで観たし、東宝が「東宝8. 15シリーズ」として毎年終戦記念日に向けて制作していた戦争大作である、『日本のいちばん長い日』（67年）、『連合艦隊司令長官 山本五十六』（68年）、『日本海大海戦』（69年）も大学時代にリアルタイムで観ている。これらはその後テレビで放映されるたびに、何度も観ていた。

中学・高校時代は吉永小百合・浜田光男の青春映画を中心とする日活映画が多かったが、松竹、東映、大映、そして東宝の代表作もそのほとんどを観ている私にとって、三船敏郎は石原裕次郎や中村錦之助、勝新太郎以上の大俳優だった。そんな三船を取り上げた本作は必見！

◆軍隊時代、戦後の食うためのニューフェイスへの応募、黒澤明監督との出会い、そして俳優としての絶頂期。三船のサクセスストーリーは、まさに戦中、戦後、そして高度経済成長時代の日本をまっすぐに駆け抜けていく姿だが、本作からは酒を愛し、車を愛しながら、仕事にもとことん真剣に向かい合う三船の姿が浮かび上がる。しかし、全盛期がずっと続かないのが人の常だ。三船にも不遇期が訪れたが、彼はそれを克服し見事に復調。しかし、三船プロの危機や離婚の危機を迎え、最後は1997年にさびしく息を引き取った。

まずは、80分の本作でそんな三船の人生をたっぷり味わいたい。

◆私は小学生の時に、よく両親に連れられて東映のチャンバラ映画を観ていた。中村錦之

介、東千代之介、片岡千恵蔵たち、そしてそこには時々美空ひばりも加わっていた。しかし、本作はまず三船敏郎の「チャンバラもの」から入っていくが、チャンバラものは日本映画の最初でかつ大人気のジャンルだ。「目玉の松ちゃん」をはじめ、多くのチャンバラ映画スターが誕生したが、『七人の侍』と『用心棒』はそれまでのチャンバラ映画とは全く異質かつ異次元の作品だ。

この両作は、米国のジョン・スタージェス監督の『荒野の七人』(60年)、イタリアのセルジオ・レオーネ監督の『荒野の用心棒』(64年)の原型にされるほど、世界的に影響を与えた。そこから始まった三船の、とりわけ黒澤明とのコンビによる作品は素晴らしいものばかりだった。また、黒澤明監督以外の稲垣浩監督とコンビを組んだ『無法松の一生』(58年)や『宮本武蔵』(64年)も素晴らしかったし、大学卒業後に観た、アラン・ドロンの、チャールズ・ブロンソンと共演した『レッド・サン』(71年)も三船の国際スターぶりがすっかり板についたエンタメ作品になっていた。

タイトルを『THE LAST SAMURAI』とした本作では、彼の多くの出演作から、まさに「ラスト・サムライ」としての俳優・三船敏郎をしっかり味わいたい。

◆本作は、三船の葬儀で黒澤明が三船に捧げた弔辞を、香川京子が朗読するシーンで終わる。そのセリフは「僕たちは共に日本の映画の黄金時代を作ってきたのです」というもの。まさに、そのとおりだ。折しも、第71回カンヌ国際映画祭で、是枝裕和監督の『万引き家族』がパルムドール賞(最高賞)を受賞したことによって、日本映画が今、世界から注目されている。

しかし、昨今の日本の映画界の状況、そして政治、経済、文化、外交、軍事を巡る日本の状況を見ると、再び日本の映画の黄金期を作るのはちょっと難しいかも・・・。

2018(平成30)年6月14日記